



第7回国際スポーツ雪かき選手権集合写真（小樽市立北陵中学校体育館）

雪かきはスポーツだ！ 大学生が再生する地域コミュニティ

松代 弘之 一般社団法人日本スポーツ雪かき連盟・代表理事

1. はじめに

小樽市は年間の降雪量が556cm、最深積雪が118cm（気象庁発表：平均値）を記録する豪雪地である。明治時代以降、石炭等の積み出し港としての繁栄に伴い、全国から集まってきた人々が沿岸部の狭い平地から山や丘に向かって家を建てだし、その結果、坂の途中に住宅街が毛細血管が張り巡らされるように急速に形成されていった。

しかし、1960年代に入ると国のエネルギー政策が石炭から石油に転換したこと、物流の拠点が札幌に移ったことで、人口の流出が始まり、1964年に最多の207,093人を数えた人口が2021年4月現在では111,538人まで減少し、年間約2,000人ペースで減少が続いている。特に、若い世代の流出に歯止めがかからない状況から少子化が進み、現在、高齢化率が41.16%に達する人口構成になっている。

そのため、急な坂や狭い路地が多い住宅街で自力での雪かきが困難な高齢者が年々増えていることや、増加する空き家前の雪かきが滞ることによる住民の生活路の遮断など、高齢者の雪かき支援や生活路の確保に必要な雪かきの担い手不足が深刻化している。

また、人口減少と少子高齢化が地域コミュニティの衰退を招いており、地域住民が協力しあって高齢者を支援する共助の仕組みが崩れつつある。

2. 雪かきの担い手不足解消を目指して

当連盟は、雪かきの担い手不足を解消することを目的に、雪かきにルールを策定し、チーム同士が競い合える「スポーツ雪かき」を考案し、2014年から国際スポーツ雪かき選手権を開催している。

雪かきを「一人で黙々と行うつらい労働」でなく、「みんなで楽しく行うスポーツ」として競技にすることで、地元の中学生や高校生などの若者をはじめ、地域外からの参加者を集めることに成功し、「スポーツ雪かき」を自力での雪かきが困難な高齢者の支援拡充、地域コミュニティの再構築によるリーダー育成のモデル事業として確立させようとしている。

当連盟の活動は、小樽市地域福祉計画「たるたる支え愛プラン」（2021年3月策定）の「施策13：雪との共生」や小樽市雪対策基本計画（2020年12月策定）の柱である「協働による雪対策」を小樽市、小樽市社会福祉協議会、小樽市総連合町会などと共に市内全域に普及させ、活力を失いつつある地域コミュニティの再生を目指すものである。

3. スポーツ雪かきの“真”の狙い

スポーツ雪かきは、急速な人口減少と若者の流出による雪かきの担い手不足を解消するためには画期的なアイデアであると言える。



「雪かきはスポーツだ！」を全員で発声し、競技を開始（第7回：小樽市石山町会）

なぜなら、「雪かき」を「つらい重労働」ではなく「スポーツ」として演出することにより、参加者の興味を引き付け、競争心をかき立て、誰かに頼まれて気乗りしないまま他人のために雪かきをするのではなく、自ら進んでスポーツ競技としての雪かきをしたくなる動機を与えているからである。特に中学生や高校生の参加者に、スポーツ雪かきをとおして高齢者の支援ができることに気付いてもらい、これまで、雪かきや自力での雪かきが困難な高齢者の現状に関心がなかった人々が、自ら雪かきの担い手になってくれることを狙っている。

中学生や高校生ばかりではなく、他の地域からの参加者、雪になじみのない地域からの参加者も大勢いることから、このアイデアの効果が実証されている。

小樽市では、高齢者世帯（市民税所得割非課税世帯等が対象）などに対して、玄関先から公道までの生活路確保、屋根の雪下ろし、置き雪（※）除去に活用できる福祉除雪（小樽市社会福祉協議会が窓口。業者に依頼する際の費用の一部負担等）を実施している。

しかし、対象となる世帯に所得制限があることや、福祉除雪に登録しているボランティアおよび有償作業員の担い手不足により、支援が必要な高



小樽北照高校野球部が優勝（第7回：小樽市石山町会）



小樽名物「あんかけ焼きそば」と手作り豚汁を参加者とスタッフ全員で食す（第7回：小樽市立北陵中学校）

齢者に行き渡っていない。住宅周辺のまとまった雪を取り除くだけでなく、彼らには日々降り積もる雪を取り除いてくれる近隣住民の存在が必要

であると考えている。

スポーツ雪かきの究極の目標は、日々彼らの雪かきをしてくれる中学生や高校生を増やすことにある。ゲームを通じて競い合うことに慣れている中学生や高校生に対して、統一されたルールで誰もが気軽に参加できる仕組みの構築が重要であり、「スポーツ雪かき」が彼らのモチベーション維持に効果があると確信している。

※置き雪：除雪車両が押しつけた雪が、車道の脇に面した車庫の前に残ることがあり、この置き雪をどかさなければ車の出し入れができない。硬くて重たい氷に近い雪のため、力のない高齢者や女性にとって除雪が困難である。

また、地域コミュニティ衰退は、町内会役員の高齢化ばかりが要因ではないと考えられる。若者の流出も一つの要因であろうが、地域に残る若者が仕事や子育てに多忙であり、町内会活動に参加できる若者が少ないことが大きな要因であるように感じている。

地域の若者が活動できないのであれば、地域外から比較的自由に時間が使える大学生を呼び込み、地域コミュニティの再生の主力にしようと考え、彼らが主体的に活動できるよう組織化しようとしている。

私は札幌学院大学の非常勤講師として「キャリアデザイン演習」を担当しており、大学生との関わりが深い。昨今、地域活動やボランティア活動に興味を持つ大学生が増えていると実感しており、大学生の力を借り、スポーツ雪かきによって地域の子供たちと高齢者を結び付けようと考えたのである。

一般的に、子供たちが参加するイベントに関心を寄せない親はいないと思う。多忙であっても子供たちが参加することでPTAも参加するようになる。かつて、小中学校の運動会は地域の住民総出のイベントであった。スポーツ雪かきに古き良き共助が盛んだった頃の地域に戻せる手応えを感じたことから、文科省が推進するコミュニティスクールの精神と同様に、スポーツ雪かきを住民総がかりで子供たちの地域愛を育むプログラムに位置付けようとしている。

子供たちは、互いに競い合い夢中になるなかで、地域の実情を知り、高齢者など多くの住民に励まされ感謝されることで、人の役に立つ満足感や使命感、みんなで社会課題を解決する達成感を得る

ことができる。その活動の中心として活躍し、地域コミュニティの再生に成果を残した大学生が、社会人になっても地域の課題を解決しようとするリーダーに成長すると確信している。

4. コロナ禍でも活動を止めない

当連盟の活動が順調に成果をあげていたところに、新型コロナウイルスの感染拡大による集中対策が北海道から発令され小樽市も対策地域に指定された。

この措置により小樽と札幌の不要不急の往来自粛が求められたため、当初、令和3年2月13日に開催を予定していた第8回国際スポーツ雪かき選手権を2月27日に延期せざるを得なくなった。しかし、感染が収まらない状況を考慮し、第8回国際スポーツ雪かき選手権は、いわゆる“密”を避けるべく、参加者を分散させるためにリモートで開催することになった。通常であれば、参加者を学校の体育館に集めて開会式・閉会式、および昼食会を行う予定であったが、大学生スタッフや町会役員の皆さんと協議した結果、規模を縮小し、感染対策を講じたうえで開催することを決意した。

私は大学生に対して、常に「できないと決めつけて簡単に諦めるのではなく、できる方法を粘り強く考えなさい」と説いている。大学生スタッフの誰一人も「中止にしよう」と発言しなかったことに、コロナ禍にあっても彼らの成長を感じることができたのは幸いであった。

このリモート開催とは、参加チームがZoomを通じて開会式・閉会式に参加して、競技の結果(20分間雪かきした際の消費カロリーで競い合うため、各チームに活動量計が提供されている)をLINE上に消費カロリーを写真で投稿してもらう



Zoomによる第8回国際スポーツ雪かき選手権開会式



ソーシャルディスタンスを意識した開会式
(第8回：小樽市入船六三町会館)



山形県庁チーム (第8回：山形県大江町)



Zoomの映像でスポーツ雪かきを観戦する役員の皆さん
(第8回：小樽市入船六三町会館)

ことで、スポーツ雪かきを大会として成立させる方法である。

リモート開催には、小樽市内の中学生、高校生、社会人ばかりではなく、旭川市内の家族や山形県庁がチームを作って参加し、町内会館では、その様子をZoomで映し出し、町内会役員の皆さんに見ていただくことができた。

5. 持続可能なスポ雪を目指して

当連盟は、個人が継続して「スポーツ雪かき」に取り組むためのイノベーションを起こそうとしている。そのためには、国際スポーツ雪かき選手権に参加しなくても、「日々一人でやる雪かきの作業量を計測できる装置があるといい」と考えた。日々の作業量をランキング形式で公開することで、競い合える環境と装置があれば子供たちが継続してスポーツ雪かきを楽しむことができる。これが、将来の雪かきの担い手を増やし続けるスポーツ雪かきの姿である。

雪かきの作業量を測定する装置は、2019年から北海道科学大学木村尚仁教授により、雪かきの作業量を計測できる手袋「スノートレーニングセンサーグローブ」の開発を進めている。スコップで雪をすくって運ぶ際に、手袋にかかる荷重の時間変化を計測することで、雪かきの作業量を算出する仕組みである。将来的には、測定信号をスマホアプリで検出して、作業終了後にクラウド上に保管、個人別の作業量ランキングがリアルタイムで表示される仕組みを実現したい。



スノートレーニンググローブの試作機

6. おわりに

国際スポーツ雪かき選手権を始めて、8年間が過ぎた。大学生たちと共に、試行錯誤しながらも地域コミュニティ内の学校と町会を結びつける活動に発展している。年々社会課題が増え続ける現代において、共助は弱者救済の最後の砦^{とりで}になると考える。昨今、SDGsが取り上げられ“異様な”ブームになっているが、すべてのテーマに共通の理念である「誰一人取り残さない」と忘れてはならない。

